



飯山市文化財候補

いいやまふっかつきょうかい
飯山復活教会



○飯山復活教会（建築年：1932 年）

飯山復活教会は、木造平屋建て、前室上部のみ2階建てで、昭和7年（1932）に建てられた、単廊式の教会堂である。一般民家を買収して古くから運営を続けていた教会が、昭和になってこの建物を建設した^{注4)}。飯山復活教会の建設に至ったのは、実際に建設にも携わったジョン・ゲージ・ウォーラー司祭（1863-1945）の貢献が大きかったといわれる^{注5)}。カナダ人宣教師のウォーラー司祭は、長野県の北信および東信地方の伝道活動や聖堂建設において、中心的役割を担った人物である。南北方向に棟が通り、梁間3間半（約6.3m）、桁行7間（約12.7m）の規模で、木造、切妻、屋根は鉄板葺き、一部スレート葺き屋根で、妻入り、壁は大壁造りで、外壁は下見板張り、内壁は白漆喰仕上げとなっている。尖頭アーチ状の入り口の先に3畳程の玄関がある。南側の引き戸を開けると約10畳の前室があり、その南側の板戸の先には約24畳の会衆席があり、いずれも畳敷きである。さらにその南側の一段上がった所に約5畳半の内陣、その東側に祭服室、西側に居室という配置になっている。内陣には箱型の祭壇や、その後ろに前室の上には二階があり、会衆席が見渡せる窓が付いている。教会の最上部には鐘が設置されていて、鐘を鳴らすための階段が2階に置かれていて、その場所から小屋組を確認することもできる。建物の南側には半地下で納骨堂が設けられている。居室の東側には子供達が演劇などをする際に使われていた牧師館があったが、大雪の際に垂木が折れてしまったことと、街の広小路化のために取り壊された^{注6)}。そのため居室東面には扉が取り付けられている。増築部分は前室の東西両隣の部屋で、それぞれ便所と事務室になっている。増築部分を除いた創建当時のファサードは、切妻屋根頂部の鐘塔の効果もあり、現状よりも垂直性の強いデザインであったことがうかがわれる。

飯山復活教会は寺の町^{注7)}として知られる飯山において、キリスト教文化の伝道を語る上で必要不可欠な存在である。また、ジョン・ゲージ・ウォーラー司祭の長野県における布教活動の貢献を示す当時の姿を残した貴重な建物である。以上より、飯山の歴史を歴史を伝える重要な建物として非常に価値が高い。このような価値をもつ飯山復活教会は登録有形文化財登録基準の「一、国土の歴史的景観に寄与しているもの」に該当する。建設後50年を経過しており登録有形文化財登録基準を満たしている飯山復活教会は登録有形文化財としての価値を有している。なお考察の根拠としているものは、現状実測図面、史料、文献であり、これらに関する調査は所有者（飯山市）の許可を得て行った。

注)

- 1) 飯山市振興公社『飯山風土記—信濃の宝石「いいやま」—』（ほおずき書籍、2003年）1-2頁参照。
- 2) 飯山市誌編纂専門委員会『飯山市史 歴史編（上）』（飯山市 飯山市誌編纂委員会、1997年）461頁参照。
- 3) 飯山市誌編纂専門委員会『飯山市史 歴史編（下）』（飯山市 飯山市誌編纂委員会、1997年）461頁参照。
- 4) 平成26年（2015）年10月27日に実施した、信州大学工学部建築学科土本研究室の実測およびヒアリング調査より参照。
- 5) 長野聖教主教教会編『ジョン・G・ウォーラー司祭 その生涯と家庭』（信濃毎日新聞社、2005年）168-169頁参照。
- 6) 平成26年（2015）年10月27日に実施した、信州大学工学部建築学科土本研究室の実測およびヒアリング調査より参照。
- 7) 飯山市振興公社『飯山風土記—千曲辺の白い古都—』（岸田孔版印刷所、1994年）4頁参照。

信州大学工学部建築学科教授 土本 俊和
(博士（工学）・建築史家)